
いただきます

叶井秦雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いただきます

【NZコード】

N3674F

【作者名】

叶井秦雨

【あらすじ】

俺は、二人とも大好きだよ？ 友人想いな青年の人食い話。

(前書き)

- ・カニバリズム表現があります。
- ・おかしい人の視点です。

「君だつて本当は灯あかりが好きだから殺した。憎んでなんかいなかつた。だから眼球も脳みそも心臓も全部全部全部全部全部全部全部食べれたんだろ？まあ半分は俺が食べたんだけど。

誰にも知られずに殺せば、行方不明になつた灯は五年十年二十年と時が経つて皆忘れてしまうからね。

殺した本人は食べちゃつたわけでずっと一緒にいるから忘れるなんてことはない。四六時中一緒にいる物を忘れたりなんてしないだろ？そういう意味では忘れないようにするために殺したのかもね。

ん？違うな。忘れたくないから食べれたのかなあ。なかなか忘れられないものだよ人殺しも人食いも。

だつて普通はそんなことしないし。そんなことする人は一種の異常者。そんな願望を持つ俺も異常者だと思つ。

こんなこと考えといで普通だと言つほど世間知らずじやないし、これが普通だつたら世界は相当イカれてる。今の人口問題も食糧難もとつぐに解決してるよ。…ところで君は俺にだけ喋らせるつもりなの？さつきから何も言つてこない。喋るのも億劫かな。食べ過ぎで。

「

特に何も言わない。こつちがずっと喋つてゐる一方的な言葉は君に届いてゐるのかな。

「君は、灯を食べちゃつたね。」

微かに反応があつた。小さな声で肯定する声が。

「俺だつて灯が好きだつたんだよ？本当に、食べちゃいたいくらいに。」

「……あ……」

また、小さな声が聞こえた。

「ほら、俺たち友達じゃない。灯と俺と君で3人、近所でも有名な仲良しさ。今だつてそう思つてるけど君は違うの?どんな友達よりも最優先するべき友達だと思つてたんだよ。君も灯もね。なんでつて、約束じやないか。ずっと3人で友達だつて。それに君と灯は俺にとつて最愛の2人だ。それ以上望むのは贅沢つてものじやないかな?例え愛情の大きさに差があつたつて。俺は2人を愛しているよ。」

これだけは変わらない。不变だ。

灯が好きだ。氣だてがよくて器用な灯が好き。
遊慈^{ゆうじ}が好きだ。優しくて誰にでも平等な遊慈が好き。

「遊慈?」

「辛い…から…死のう…と…した。」

今度はさつきとは比べ物にならない位はつきりした、でもまだ弱弱しい声が聞こえた。

「片思いは…もう…辛い…から…独りで…死ぬのは…嫌…だから…二人を道連れに…しようとした…。道連れにしよう…として…最初に殺した…のが…灯だった…それだけ。別に…獅良^{じりょう}…からでも…良かつたん…だ…。灯…ごめん。」

ああ、なんとなく想像通りだつた。

寂しがり屋の遊慈は、独りでいるのが怖かつたんだ。だから殺しちやつたんだ。

けど、遊慈は優しいから、殺してしまった灯に対してもなにもしない。

全部、想像だつたんだけど、本当にそつだつたんだ。
俺はちやんと、遊慈のこと、解つてたんだ。解つてないなんてこと、ない。

「俺と灯は親友だから?」

首だけ動かして肯定した遊慈を、俺はそつと抱きしめてみた。
冷たくて、気持ちいい。

「俺は道連れにされてもよかつたよ。」

「バイ…なんだな。」

「こんなのを恋愛感情というのなら、すべての恋する乙女に謝らな
きやね。」

恋愛にするにはあまりに不純過ぎる想いだ。

でも、愛情よりは純粋な想い。

さつきよりも鮮明に聞こえてきた遊慈の声を聞きながら、俺はもう一度彼に尋ねた。

「話をうんと前に戻すけど、小食の遊慈が灯を半分も食べれたのは、死んでも灯を忘れてくなかったから?」

「… そうなのかも。」

忘れられるのは怖い、だけど、死んで忘れるのも怖い。

俺が思うに、遊慈は三人の中で一番憶病なんだ。

俺は遊慈が死んだって忘れたりしなかったと思うし、俺が死んだつて一人を忘れたりしない。きっと灯もそつ思つてくれるだろう。今となつては、ありえない話だけど。

「遊慈。そんな怖がらなくて、良かつたんだよ？」

「でも俺、怖くて。」

「うん。不安だつたんだね。でも、もう大丈夫だろ?」

『「ん」』と返事をする遊慈。その声せせりあつと置くべきでせう。

「御馳走様。さて、後片付けしないと。」

後ろの扉からがたがたと騒々しい音が近づいてくる。人の家に無断で入るなんて、本当に、どうかしてるよあいつら。

「遊慈つ！ 笹ね……か……。」

「富田君！見つかった！？」

高田、見なー!!

あああつ――――――――――――

ああ、五月蠅い女だなあ。人様の食卓見てそんな甲高い悲鳴を上げるなんて。近所に迷惑だろ？五月蠅い上に馬鹿だなんて、救えないね。それで灯の友達だなんて、灯には合わないよ。灯にはもつと物静かで賢い女の子が良いに決まってる。だから、高田由香たかだゆかは嫌いなんだ。灯に釣り合わないくせに当然のように灯の親友なんて位置に

居るなんて。おこがましいにも程がある。

富田…なんだつけ。そうそう、とみたかつき香月だけ。こいつも嫌い。人畜無害そうな面の裏で遊慈を騙そうとする。可哀想に、遊慈はこんな男に騙されたのか惚れてしまつて、『彼女持ちだつていうのにどうしたらしいんだろう』と相談に来たんだ。

その彼女が、灯だった。こいつは遊慈だけじゃなく灯も騙していたんだ。もしかしたら、高田より嫌いかもしれない。どちらにせよ、遊慈よりもまずそุดなあ…。

「笛岡…おまえ…遊慈を食つたのか？」

「だから？」

「つ…！狂つてる…つ…！」

「狂つてる、だつてさ、遊慈。遊慈の好きな人にとって好きな人を食べることは狂つてることなんだつて。」

「そう、なんだ。」

「俺としては、灯と付き合つてなお且つ遊慈にも色使つたこいつの方が頭おかしいと思うんだけど。」

「色使…？てかお前誰と話してるんだよ！？遊慈は、お前が食つたんだぞ！…？」

「そう。俺は遊慈を食べた。だから、もう俺にしか聞こえない。灯と遊慈の声は俺にしかわからない。」

「これは遊慈の望みだ。叶わない恋から逃げたくて、でも一人じゃ逃げられないから俺と灯と一緒に逃げてもいたかつた。なら、俺が灯を食べた遊慈を食べれば万事解決だろ？これで三人離れる」となく、遊慈は辛い思いをせず、灯はお前に騙されず、俺はずつと一人といれて、一石二鳥ならぬ一石三鳥だ。」

「遊慈の望みだ？ふざけんじやねえっ！お前、遊慈がなんて言つてたか知つてるか？“獅良が怖い”って言つてたんだぞ！？何時もの、

昔の獅良は何の躊躇いもなく人を食つたりするイカれた奴じゃなかつたつて！お前おかしいよ…！何の躊躇いもなく幼馴染を食うなんて…どうかしてる…つ…！」

「君たちって本当に馬鹿。好きだから、何の躊躇いもなく食べれるんだよ？ねえ、遊慈。」

「そうだね。」

「…つ…くそつ…」

「さて、一人とも、邪魔だから帰つてくれないかな？それとも、後片付け手伝つてくれるの？」

「い、やあ…灯…一之瀬君…つ…」

座りこまれても、邪魔なんだけど。

いつそこいつも殺しちゃおうか。灯のお気に入りだし、一緒にしちゃおうか。

「ねえ、灯。どうする？」

「これ以上食べたら、お腹壊すわよ？」

「それも、そうだね。」

あんな女、食べてってくれって言われたつてこっちから願い下げだ。それに、流石の俺も、遊慈の分で腹いつぱいだし。でも、遊慈で満たされてることせずじき幸せ。

「…わかった。帰るよ。でも、最後に一つ聞いていいか？」

「どうぞ？」

「お前、もしかして遊慈のこと好きだったんじゃない？だから、幸せなんだろ？」

「…あ。」

そう言われて、すんなりと納得してしまった。

確かに、灯よりも遊慈の方が美味しかったし、遊慈を食べた時の幸せは、灯を食べた時には感じなかつた。

つまり、俺が富田を嫌つてゐるのは、遊慈を夢中こなさせていたから。遊慈を、独り占めして いたから。

「そつか、そだね。気がついたよ。有り難つ富田。だから俺、富田が嫌いなんだ。」

「そりやどうも。」

「お前とはもう一度と会わない。遊慈には勿論、灯にも会わせてやらない。お前には一人ともやらない。」

「そつかよ。」

「…質問はこれだけ?じゃあ帰つて。」

「そつする。高田、立てるか?」

「灯…一之瀬君…灯…灯…灯…!…」

虚ろな目をした高田を、富田はおぶつて帰つて行つた。
さて、これからどうしようつ?

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3674f/>

いただきます

2010年11月1日09時12分発行